



Big Pit 英国国立石炭博物館

Big Pit: National Coal Museum

吉田 英生 *

YOSHIDA Hideo

1. “わが谷は緑なりき”の舞台へ

John Ford監督の“How Green Was My Valley”（邦題“わが谷は緑なりき”）（1941）は1870年代の南Walesの炭坑で働くMorgan一家を描いた不朽の名作である¹⁾。その舞台となったRhondda溪谷²⁾のBlaenavonにあるBig Pit—英国国立石炭博物館（<http://www.museumwales.ac.uk/en/bigpit/>）を2012年7月に訪れた。溪谷といっても日本の地形と比べるとなだらかな平原に見えるこのBlaenavon（Wales語ではBlaenafon）一帯の産業風景は、世界遺産（<http://whc.unesco.org/en/list/984>）にも登録されている。



図1 United Kingdomを構成する4国—England、Northern Ireland、Scotland、Wales（<http://www.woodlands-junior.kent.sch.uk/customs/questions/maps.html>）

2. 現地へのアクセス

まずBig Pitを将来訪れる方のために、貴重な海外での時間を無駄にしないよう、詳細に説明させていただこう。

ケルト文化が色濃く残るWales地方の首都CardiffはLondonから250km程度の距離で、London Paddington駅からCardiff Central駅まで2時間あまり。その途中では、Bristolから北西に向かったところで、英国でいちばん長いSevern川（その上流は近代製鉄発祥の地Ironbridge²⁾につながる）がGreat

Britain島に裂け目を入れればかりの地形を通過する。この裂け目を鉄橋でなく海（川）底トンネルで抜けてWalesに入ると、駅名表示がケルト語と英語の二通りになることで、“連合王国”という名のイギリスを実感する。

Cardiff Central駅前のバス乗り場C3からPontypool行きX3系統のバス乗車時に、Big Pit までの7ポンドの切符を購入する。65分程度で山中の小さな町であるPontypoolのTownhallに着く。ただし、X3系統が到着するTown Hallの目立たない停留所は、折り返し点ではなくCardiffに戻るバスが発車する停留所でもあるので、うっかりして降りそびれないように注意が必要だ（図2）。降車後、反対車線を100mほど戻った所に位置するバス停から30系統のバスに乗り換える。このバスは往復とも規則正しく1時間に1本、しかもBig Pitに寄り道してくれるのは2時間に1本なので、あらかじめStagecoach（South Wales地方）の時刻表（<http://www.stagecoachbus.com/localdefault.aspx?Tag=Caerphilly>）で調べておくことをお勧めする。30系統の小さなバスは、急峻ですれ違いも困難な山間の道を通り、50分程度でBig Pitに着く（図3）。



図2 バスを乗り換えるPontypoolのTownhall



図3 Big Pit前の30系統バス停留所

*京都大学 大学院 工学研究科 航空宇宙工学専攻 教授
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail : sakura@hideoyoshida.com

注) 第二次世界大戦が勃発したために Wales でのロケは中止となり、米国でオープンセットで撮影されたとのことである。

なお筆者の場合、帰路では30系統のバスを2時間近く待たされるはめになったので、徒歩でBig Pitの坂を降り、運良く通りかかった車をヒッチハイクして近くのBlaenavonまで5分ほど乗せてもらった。おかげで、30系統とは異なり相対的に広くてまっすぐな道を守るX24系統に乗ることができ、往路の所用時間の半分25分程度でPontypoolに到着できた。このX24系統は、さらにPontypoolからNewportまで30分あまりで直行するので、Cardiffに特に用事がないならLondon寄り位置するNewportからアクセスするのが便利であろう。

3. 100年前にはピークを迎えながらも現在は“遺産”に

残念ながら同博物館のウェブサイトにはたいした情報はないが、現地で購入したガイドブック³⁾からはまとまった情報が得られるので、以下では特に断らない限り同書からのデータに基づいて述べる。

前述のIronbridgeからも遠くはないBlaenavonでは1789年に製鉄が始まり、そのエネルギー源として石炭産業もほどなくして興った。Wales地方は石炭紀(約3億年前)には赤道付近であったので、そこで堆積した多量の植物が長年間に石炭層となり、現在のRhondda渓谷に幅広く分布した。とりわけBlaenavonでは良質の瀝青炭(bituminous coal)が取れた。さらに、鉄鉱石、石灰石、そして多雨による水量豊かな川(水力)という好条件も揃っていた。Big Pit(当初名称はKearsley's Pit)の歴史は1860年に遡り、1880年には拡張された縦坑(楕円形)が最大5.5mに至ったところから当時としては非常に大きくBig Pitと呼ばれるようになったという。

ヴィクトリア時代後半の大不況(1873-1896年)が“わが谷は緑なりき”の背景となった⁴⁾が、大不況から立ち直った1913年にはWalesの炭坑は史上最高の生産量を記録した。しかし、いわゆるエネルギー革命の向かうところは世界いずこも同じで、1920年には27万人の坑夫がいたものの1930年

代には早くも急減し、Big Pitも1980年にはわが国の炭坑⁴⁾と同様に存続することはできずに廃坑となった。今から100年前にピークを迎えながらも文字どおりの“遺産”となってしまったのである。

4. まずは地上から

Big Pitをまずは地上から眺めると、見学コースの出発点となる入口(図4)、そして本来の順路としてはあとになるが、坑夫を運ぶ列車(図5)、炭坑に登る階段(図6)、帰宅前に



図4 Big Pit入口(ケルト語と英語が併記されている)



図5 坑夫を運ぶ列車でランチ中の小学生



図6 炭坑への階段(映画では多数の坑夫が朝夕通うシーンが印象的)



図7 Big Pitの上方からBlaenavonの町並みを望む

真っ黒になった体をシャワーする建屋が残る高台などが往年の活気を思い起こさせる。図7は高台から見たBlaenavonの町並みであり、元抗夫あるいはその子孫が住む多数の家々が溪谷（山）中に分布しているが、いったい今はなんで生計を立てているのだろうと思わず余分な心配をしてしまう。

5. 90mもぐった地下の坑道見学

図3や図7でいちばん目立つBig Pitのシンボルは、地上と地下の坑道との間を昇降するリフト（カゴ）の巻き上げ機の塔である。このリフトは現在、見学者用に利用されている。見学は無料で、1台のリフトに乗ることのできる15人前後で区切り、10分程度の間隔で進められていく。前述の30系統のバスがBig Pitに着くころには、筆者と地元の老人2人の計3人が乗っているだけという寂しい状況だったが、Big Pitには観光バスで社会見学にやってくる小学生が少なくないようで、図5にも見られるようにBig Pitは小学生を中心に家族連れや年配者でそこそこ賑わい、30分程度待たされた。

各グループは、オレンジ色のつなぎを着た元抗夫の係員に案内される。まずヘルメットをかぶり、キャップランプを取り付け、重いバッテリーを腰にベルトで巻き付ける。廃坑とはいえ石炭層が露出し可燃ガスの危険性があるので、腕時計、携帯電話、カメラなど、スパークの危険性があるものはすべてグループごとにロッカーに預けて手ぶらでもぐらなくてはならない。万全の準備をした後、カゴは90m



図8 ヘルメット・キャップランプ・バッテリーの装着



図9 山本作兵衛による「ガス爆発と検定灯」

降下して地下坑道で50分の見学が始まる。係員の説明が一旦つくと“Any question?”となり、子供も大人も活発に質問する。ただし、Walesなまりもあつたのか（と言いつつ）、ネイティブ間でベラベラやられると悲しいかな筆者にはほとんど聞き取れない。

筆者が興味深く感じたのは炭坑に不可欠の照明で、電気ランプが普及するまでの安全灯（flame safety lamp）は、可燃ガス濃度のセンサーとしても使われたそうである。安全灯についてはウェブサイト⁵⁾に詳しいが、“炭鉱絵師”山本作兵衛（世界記憶遺産）の図9にもリアルな描写がある⁶⁾。

6. 炭坑—それは人類の文明維持・発展への執念の象徴

以上もっぱらガイドブック的な表面的な内容で恐縮であるが、本章ではBig Pitから少し離れてむすびとしたい。

今や文字通り過去の遺産として扱われることの多い炭坑に、筆者はことさらの関心を覚える。その理由は、人類がその文明を維持・発展するために、山本作兵衛の絵にも描かれているように洋の東西を問わず抗夫が極めて過酷な労働条件（爆発・落盤事故の危険性も含む）で石炭を掘り続けることがつい最近まで必要とされたという事実への驚きであり、エネルギー源が薪から石炭に変わって300年間の長い期間にわたって継続してきた人類の執念への感動である。炭坑こそは人類にとって不可欠のエネルギーを象徴している。

自戒を込めていうと、今日わたしたちがスーパーで買う農産物や海産物も、家庭で電気コンセントやガス管から気軽に得るエネルギーも、もともとの生産の現場を意識することが極めてまれである。身の回りのほとんどのものは、見た目美しく整然と供給されている。そんな時代にあつて、炭坑というのはエネルギーの原点を生々しく直視させてくれるダイナミックなサイトなのである。専門・非専門にかかわらずエネルギー・資源問題を考える際には、人類が長年頼ってきた石炭を、単なる知識としてではなく全身を揺さぶるような実感とともに意識していただきたいと願っている。そして「炭素」という言葉の重みも噛みしめたいと願う。

参考文献

- 1) 森本哲郎；文明の主役—エネルギーと人間の物語、(2000)、新潮社。
- 2) 吉田英生；アイアンブリッジ溪谷博物館、伝熱、89、(2006)、45-192。
- 3) National Museum Wales；BIG PIT NATIONAL COAL MUSEUM A GUIDE；(2005)、ISBN 0 7200 0557 4。
- 4) 吉田英生；田川市石炭資料館、伝熱、39、(2004)、43-183。
- 5) <http://www.mining-memorabilia.co.uk/index.htm>
- 6) http://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/yamoto_sakubei/page_845.htm